災害遺産と創造的復興

国際シンポジウム／ワークショップの記録

オープニング・セッション

2011年12月21日

レクチャー1

地域研究と情報学

柳澤 雅之　京都大学地域研究統合情報センター

大学院事務長のムハンマド・ナシル先生、TDMRCセンター長のディルハムシャー先生ならびにご列席のみなさま、津波から7周年を迎え、今後の復興に向けた大切な一歩になるこのメモリアルな場で、みなさんとこのように意見交換できる機会を与えられたことに感謝いたします。私は柳澤雅之といいます。京都大学地域研究統合情報センター（地域研）に所属していて、地域情報学プロジェクトの代表をしております。本日は地域情報学プロジェクトを代表して、地域研究とは何か、地域情報学とは何かについて、短くお話ししたいと思います。

地域研究とは、地域社会とグローバルな変化とをつなぐ学問分野

まず、地域研究とは何かについてお話しします。一言でいいますと、「地域社会で起こっている事柄をベースにして、グローバルな課題に答える学門分野」だと考えていただければいいと思います。それは、これまでの欧米諸国の目的に合致した世界各地の地域社会の研究から、欧米の論理を相対化して、多様な地域社会の共存を可能とする新しい地域社会の研究へとシフトしている学門分野であるともいえます。

では、この地域研究がどのような歴史的経緯のもとにできてきたのかを短く説明します。そもそも、植民地化した国、あるいは今後植民地化しようとしている国の資源や社会のようすを知るために地域の研究が必要とされました。たとえばインドネシアやアチェの資料がオランダ東インド会社の資料としてもたくさん残されていますし、フランスでは熱帯諸国の植民地で得た資料をもとに熱帯地理学が発展しました。私たち地域研の資料の一つである英国議会資料（BPP）からも、当時イギリスが植民地とした国の厖大な資料を探すことができます。

そのような植民地研究が、第二次世界大戦後は戦後の冷戦構造下で、敵国あるいは同盟諸国の政治・経済分析のための学問として、とくにアメリカで発達しました。しかし1960年代から70年代にかけて、国際的な技術支援や国際関係の変化が起こるなかで、地域社会そのものの理解を目的とした学術的な分野として地域研究が確立していきます。これは、それまでの支配の方法を前提とした欧米中心の見方がどんどん廃れることにつながります。また、1980年代、とくに後半以降ですが、グローバル化が進展するなかで、地域社会とグローバルな変化とをつなぐための学門分野として地域研究は新しい展開をはじめました。

資料1-1　地域研究の特徴と課題

1.	社会・文化・自然を取り入れた学際的研究。分野を横断する複合的な問題群への対応が可能。
2.	地域社会から現代的でグローバルな課題を考える。人口増加や高齢化、地方分権と中央政府の役割、環境問題、開発といった現代的でグローバルな課題が顕在化するのはすべて地域社会である。地域社会の現場から考える。
3.	地域の固有性を尊重した新しい世界を構想する。欧米の発展径路を相対化し、多様な地域社会をベースにした新しい世界を構想する。

地域研究の三つの特徴と対応できる課題

このような特徴をベースにして、どのような課題に地域研究が対応できるかについてお話しします。第1の特徴は、地域の社会・文化・自然をすべて取りこんだ学際的な研究であるということです（資料1-1）。学際的な研究であるからこそ、分野を横断するような複合的な課題に対応することが可能です。たとえば環境問題でも、自然を保護すること、地元の人たちの生活を守ること、そこにある資源を使うこと、そこにいる人たちの慣習を守ること、このようなことをすべて考えたうえで、地域研究は環境問題に取り組みます。

二つめの特徴は、地域社会から現代的でグローバルな課題を考えることにあります。たとえば、災害発生時の現場である地域社会がどのように対応したのか、その後の復興をどう構想するのか、復興を実現するま

資料1-2 「地域の知」の横断検索の例

1.	異なる地域や生態系の中で農村の人たちが培ってきた自然利用に関する知恵を横断的に検索・利用可能とし、統合的な自然利用と考える。
2.	地方政府や中央政府の役所が個別に管理・所有する住民資料を横断的に検索・利用可能とし、知恵を蓄積する。
3.	図書館、博物館、大学などが個別に所有する研究資料を横断的に検索・利用可能とし、統合的な研究をする。
4.	異なるformatの画像・映像・文書・数値等の資料を横断的に利用する。

でのプロセスをどう一般化しグローバルな課題として他の地域に役立てるのかを考えるのも地域研究の課題のひとつです。

地域研究の三つめの特徴は、地域の固有性を尊重した新しい世界を構想することにあります。地域研究では、欧米の発展プロセスを相対化して多様な地域社会をベースにした新しい社会を構想します。

このような地域研究を進めるひとつのアプローチとして、地域研では地域情報学を構築してきました。地域研究がこれまでに蓄積したいろいろな地域の知恵や経験に関する情報があります。また、地域が自立的に活動するようになり、地域社会自らが自分の地域の知恵や経験を蓄積するようになってきました。こうして、情報学の技術と考え方を応用して、「地域の知」を集積し、横断的に検索・利用できるようつなぎ、そのつないだ「地域の知」をグローバルに役立てると同時に地域にも役立てる。地域情報学ではそのようなことを目的としています。

地域のことを知り、共感する力をもって新しい世界をつくることが地域研究の役割

資料1-2は地域情報学でしようとしていることの例です。一つめは、異なる地域や生態系のなかで農村の人たちが培ってきた自然利用に関する知恵をつなぎ、統合的な自然利用を考えることです。二つめは、地方政府や中央政府の役所が個別に管理する住民の資料をつなぎ、知恵を蓄積することです。三つめは、図書館や博物館、大学などが個別に所蔵する研究資料をつなぎ、統合的な研究をすることです。四つめは、画像や映像、文書資料、数値などのさまざまなフォーマットの資料をつないで、利用を可能にすることです。

このほかにも、さまざまな情報をつなぐことができます。このような情報をつなぐことで、地域のことを知り、共感する力をもって新しい世界をつくること、それが地域研究の役割です。

レクチャー2

アチェにおける災害リスク・マップの作製

エルディナ・ファティマ シアクアラ大学津波防災研究センター
Eldina Fathimah (TDMRC)

本日この機会に、私どもがこれまで手がけてきた災害リスク・マップ作製の経過と成果について報告できることをうれしく思います。

災害リスク・マップを作成する背景とその目的

お話を始めるにあたって、災害リスク・マップを作製した背景について簡単にお話ししたいと思います。それはたとえば地図の作製にあたってどのように権利を処理するかということですし、また、個人情報に関わる事柄をどのように処理するのかといったこともあります。続いて災害リスク・マップ作製の目的をご紹介します。

地図の作製にあたっては、まずどんな災害についての地図を作製するのかを決めます。また、マップをつくろうとする地域の住民の状況も確認します。作成にあたっては、目標を定め、また法令を遵守しながら、さらに政府との協力関係のもとでさまざまな関係者の協力を仰ぎつつ進めていきます。関係者というのはたとえば情報を持っている人たちのことで、そうした人たちの関与が欠かせません。また、一つの機関とは限らず、さまざまな情報源にあるデータをどのように活用するのかを考えなければなりません。

私どもが災害リスク・マップをつくるにあたっては、地図そのものへの理解を拡げると同時に、地図作製に必要な人びとの協力を得るため、ワークショップを開催するなどの広報活動をしています。こうした会議には、その場に集まった人たちだけなく、オンラインなどを使ってより多くの人たちが参加できるようにしています。

政府、学術界、NGO、住民の緊密な連携にもとづく共同作業

災害リスク・マップ作製にあたっては、関係する機関で協力チームを結成することが欠かせません。この共同作業を行なうには、政府、学術界、NGOなどの民間団体、そして住民の四者が密接に連携しながら取り組むことが必要です。

私たちが災害リスク・マップを使ううえでは、さまざまな地図からの情報を、インデックスを割りあてるなどして整理して、複数の指標で評価を行なって、データを抽出します。

災害リスク・マップの作製にあたっては、五つの段階を踏んで進めます。災害リスク・マップの作製にはさまざまな情報が必要で、たとえば過去にその地域でどのような災害が起こったのかといった歴史的な情報も必要になります。

私どもはそのような情報を、DIBA（Aceh Data and Disaster Information）というデータベースをつくって、そこに入れて整理しています。またGIS（地理情報システム）なども活用しています。そしてこのような災害リスク・マップを作製したうえで、ただ地図をつくるだけではなく、これをもとにした提言へとつなげています。

災害に関する情報を段階ごとに少しずつ追加して、災害リスク・マップを作製します。たとえば最初の段階の地図には、どの地域が危ないのかなどが示され、その上にその地域の土地利用に関する情報などが加えられていきます。このように、その地域に関する情報を多面的に解析して一つにまとめる作業を試みています。

災害リスク・マップをベースに現在被害がある地域を示す仕組みを構築

先ほどまでお話ししていたのは紙のうえにつくる災害リスク・マップのお話でしたが、これを私たちはオンライン上でうまく展開できないかと考えています。現在ナサルディンさんの指導のもとで、災害リスク・マネジネント情報システム（DRIMIS: Disaster Risk Management Information System）というオンライン上のデータベースをつくっているところです。

現在は外部からのアクセスができるかたちにはなっていませんが、プロトタイプまでの作製は完了し

ています。

これから私たちは、災害リスク・マップの情報をもとに、その地域でどんな災害が起こったのか、あるいはその地域がどんな土地利用のされ方をしているのか、そして災害が起こりやすいのはどの地域かといったことだけでなく、現在被害を受けている地域はどのような地域かといったこともわかる仕組みをオンライン上で構築したいと考えています。

私たちが京都大学地域研究統合情報センターとともにぜひ協力しながら推進したいと考えていますのは、リモート・センシングの情報で、精度のよいものをどのようにして手にいれるのかという部分です。ぜひいろいろと力を貸していただけたらと考えています。

津波防災研究センターと京都大学地域研究統合情報センターとが協力することで、アチェのデータベースに人びとがよりアクセスしやすい状況がつくられて、飛躍的に発展することを期待します。

レクチャー3

アチェ津波モバイル博物館

山本 博之　京都大学地域研究統合情報センター

今日は津波モバイル博物館についてお話しさせていただきますが、それに先立って、このワークショップの企画者の１人として少しお話しさせてください。

これは国際ワークショップです。ふつう、国際ワークショップなら英語を使うと思うかもしれません。しかし、この国際ワークショップでは、英語ではなく日本語とインドネシア語で行なうことにしました。その理由について最初にお話ししたいと思います。

災害対応研究の先頭を進むべき日本とインドネシア

私たちはこれまでに、日本とインドネシアの協力のために英語でワークショップを行なうこともしばしばありましたが、形式ばかり重視されて、実際に伝えたいことを実際に伝えたい人とのあいだで話しにくいという経験がありました。

ここでちょっと考えてみてください。津波のことを英語で何と言うでしょうか。「tsunami」です。これは日本語から来ています。では、ラハールのことを英語で何と言うでしょうか。これも「lahar」で、インドネシア語から来ています。日本語とインドネシア語で災害を表す言葉が英語でもそのまま使われています。

このことは、日本とインドネシアが災害に対応してきた経験をとてもたくさん持っていることを示しています。しかも、2004年のインドネシアの津波、そして2011年の日本の津波を経験して、災害で苦しんだ経験だけでなく、災害に対応し、復興する経験も重ねてきています。そのため、災害対応、とりわけ地震と津波においては日本とインドネシアの経験が世界の手本となりうるのであって、そのため災害対応研究においては日本語とインドネシア語が中心的な言葉となるべきだと私たちは考えてきました。そのため、このワークショップはぜひ日本語とインドネシア語で行いたいと思いました。

今日のワークショップの参加者には、インドネシア語がわかるインドネシア地域研究の専門家がいます。私が話すのはインドネシア語ではなくマレーシア語ですが、インドネシア語を話す人と言えば、西芳実さんのほかに、浜元聡子さん、服部美奈さん、亀山恵理子さんと何人もいます。ワークショップの休憩時間などにいろいろな人をつかまえて話をしてみてください。この場を大いに利用して話す機会にしてもらえればと思います。インドネシア語を話さない人たちにも、インドネシア語がわかる人たちを通じていろいろな質問をしてもらえればと思います。

それでは、私たちがシアクアラ大学の津波防災研究センター（TDMRC）と協力してつくってきた防災マッピング・システムの応用を考えるにあたって、まず実物をアチェのみなさんに見ていただいて、それをどのように活用していくかをアチェの方々といっしょに考えたいと思います。

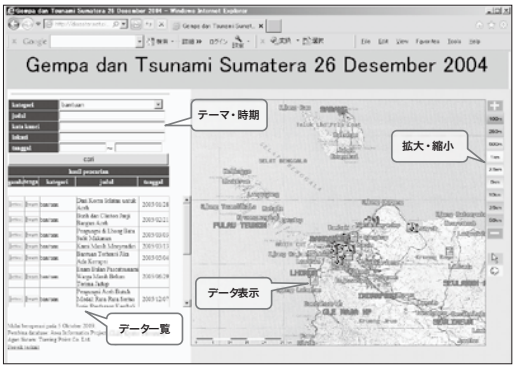
災害の現場から離れた場所で入手できる情報の有用性

災害のときには、水、薬、食べ物などとともに情報もとても重要です。みなさんは現場に行けば情報が手に入ると思うかもしれませんが、現場に行ってしまうと情報はあまり手に入りません。あるいは、情報がたくさんありすぎてよくわからなくなります。現場から少し離れたところで得られる情報から全体像を把握することが必要です。

資料3-1の地図は2007年のベンクル地震のときのものです。この地震のとき、日本語の情報はほとんどありませんでしたし、英語の情報を探してもほとんど出てきませんでした。そこで私たちは、インターネットを通じてインドネシア語のオンライン新聞の情報を集めて、それぞれの記事を地図上に置いていきました。そうすると、地図の上で、どのあたりにどんな出来事が起こっていて、どのあたりが被害の大きい地域かがわかってきます。

地震発生から24時間以内に得られた情報を地図で表示したのが資料3-1の地図です。英語の情報はほと

資料3-1　災害情報マッピング



資料3-2　津波モバイル博物館
http://disaster.net.cias.kyoto-u.ac.jp/Aceh/

んど出てきませんでしたが、インドネシア語の情報ならかなりのことがわかりますし、それを地図に載せると概要が一目でわかります。

問題は、インドネシア語の記事を一つ一つ読んで場所を調べて、それを地図上に載せる作業を短期間にしなければならないことです。土地勘があれば比較的容易かもしれませんが、そうでなければそれぞれの記事が地図上のどの地点のものなのかを探すのに苦労します。

新聞のオンライン記事をプロットするマッピング・システム

そこで私たちがつくったのが資料3-2のようなマッピング・システムです。これは、インドネシアの新聞社のオンライン記事を地図上で表現するもので、記事を収集し、日付と内容で分類して地図上に紐つけるところまで自動で行うシステムです。

このシステムはインターネット上で公開されています。この窓がテーマで、いまは「bantuan（支援）」と入っていますが、その他に被害などいろいろな種類があります。テーマを決めて検索すると、下に登録情報の一覧が出てきます。右側は地図で、拡大・縮小できます。拡大すると、バンダアチェの中央モスクがここにあって、いま私たちがいるエルメス・ホテルはこのあたりにあります。

地図上に何か所かカメラと新聞の絵があります。カメラはその地点に関係した写真があることを、新聞はその地点に関係した新聞記事があることを示しています。地図上で位置が示されているので、どこにどんな情報があるかが一目でわかります。地図上のカメラや新聞の絵をクリックすると、実際に写真や新聞記事が出てきます。このように、災害に関する新聞記事や写真などの情報を集めて地図上で表現するマッピング・システムをつくりました。

いまお見せしたのは2004年の津波に関する情報ですが、過去の出来事だけでなく、現在起こっている出来事についても毎日情報を集めています。ただし、記事を読んで、その場所がどこかを調べて、一つひとつの記事を地図の上に載せるのはたいへんなので、自動化したいと考えています。その方法についてはこのワークショップで明日以降にみなさんと考えることになると思います。

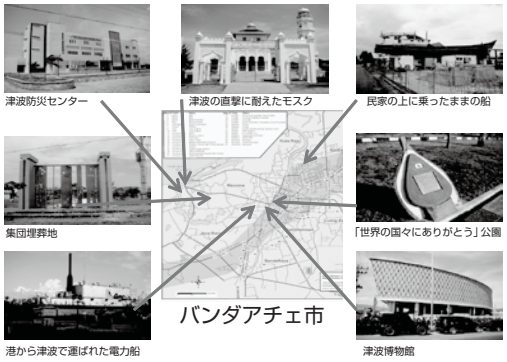
アチェの災害とまちの姿を時間の流れのなかで捉えるモバイル博物館

これからモバイル博物館についてお話しします。これは、いま見ていただいた災害地域情報のマッピング・システムの応用方法の一つで、ツーリズムへの応用を試みたものです。

バンダアチェには津波の遺物や痕跡がたくさんあります。それをどこか一か所に集めて博物館をつくるのではなく、それぞれがいまある場所に置いたまま、人々の生活のなかに置いたままでバンダアチェの町全体を博物館にしてしまうという考え方です。開かれた博物館なので「オープン博物館」と言ってもよいのですが、携帯電話などのモバイル端末を使うために「モバイル博物館」と呼んではどうかと考えています。

モバイル博物館では、インターネット上の仮想のバンダアチェ市を作り、そこに津波の遺物や痕跡を配置するということでもあります。これによりアチェを訪れなくてもアチェの様子を見ることができ、アチェを訪れようとする人が増えることが期待されますし、実際にアチェを訪れた人たちが自分たちがいまいる場所の情報をその場で得られることにもなります。

このように言うと、「バンダアチェの町にある津波の遺物や痕跡の前に看板を立てるだけでいいではないか」と思うかもしれません。それも一つのアイデアですが、それに加えて、その遺物や痕跡や風景がいま



資料3-3　モバイル博物館構想

資料3-4　津波で流された船が屋根に乗った家
〈2006年12月〉

資料3-5　津波で陸に運ばれた巨大電力船

どう見えるかだけではなく、１年前にどう見えていたか、３年前にはどう見えていたか、津波直後はどうだったか、さらに津波の前はどうだったかといった情報も提供できるし、その場所に関する文献資料や人々のコメントをあわせて総合的に示すこともできます。そうすることで、いま目の前にある姿だけでなく、それを時間の流れの中において捉えることができます。町に看板を立てるだけのオープン博物館とは違うモバイル博物館の意義はここにあります。

アチェを開かれた博物館にするには「物語」を添える必要がある

バンダアチェをモバイル博物館とすることを考える上で、重要だと思うことが三つあります。一つは、津波の遺物や痕跡を含めた文物を社会から切りとってもってくるのではなく、社会のなかに置いたまま、生きたままの博物館にすることです。

二つめに、世界の人びとは、津波からの復興を遂げ、津波を契機に社会が変わってきたことにとても関心をもっています。津波モバイル博物館は、アチェが世界の人びととどのような社会をつくってきたのかをいっしょに考える場にできます。津波モバイル博物館は一度つくったらそれでおしまいではなく、継続して更新されていくことで、継続して考えていく試みでもあります。

三つめに、ツーリズムのターゲットとするとき、地元の人たちが「これはユニークだ、おもしろい」と言っているだけでは不十分で、外の世界の人たちが「これはよい」と思えるものでなければなりません。そのためには、ツーリズムのターゲットに、外の世界の人びとが見てわかるように「物語」を添えていく必要があります。それは地元の人たちが出すだけでは不十分で、地元の人と外の世界の人とがいっしょに考える必要があります。今日はその例をいくつかお見せして、いっしょに考えるきっかけにしたいと思います。

津波の痕跡の記録と利用——民家の上に乗った家、巨大電力船

資料3-4は、津波に運ばれて民家の上に載ってしまった船です。2006年12月には写真のようでしたが、2007年ごろから民家のまわりを整えて、柵をつくり、ちょっとした博物館風にされています。現在でも、訪れれば見ることができます。これは津波の痕跡の記録です。津波を利用したツーリズムというと、みなさんこのようなものをイメージするのではないかと思います。

津波の痕跡には、資料3-5のようなものもあります。大きな電力船が津波で内陸に運ばれたものです。あまりに大きくて撤去できず、その場に置いたまま津波の威力を示すものとなっていますが、津波の痕跡としてよく知られており、多くの人が訪れるので、いろいろなかたちで使われています。2005年の12月には地元の人たちが募金箱を置いて募金を呼びかけていました。2006年には津波被害の写真を置いて展示会をしていました。2008年に行くと魚や野菜の市場ができていました。このようにいろいろなかたちで使われています。これは、文字通りの津波の遺物で、それが町の

資料3-6 「世界の国々にありがとう」公園

資料3-7　シアクアラの墓所

中にあって人々に使われている例です。

電力船はあまりにも大きくて撤去できないので、まわり一帯を囲って公園にしています。電力船を背景にして記念写真が撮れるようになっており、津波直後の写真も展示されています。津波ツーリズムといったらこのようなものを思い浮かべるのではないでしょうか。

津波によってアチェの位置づけを再確認した「世界の国々にありがとう」公園

資料3-6は「世界の国々にありがとう」公園という名前の公園です。津波が起こったとき、日曜日の早朝にこの公園に集まって体操していた人たちが、バンダアチェ市長を含めてみなさん亡くなった場所です。

この公園の隅には津波の前から飛行機が置かれています。この飛行機はインドネシアがオランダからの独立戦争を戦っていたときにアチェがインドネシア共和国に寄付したもので、この飛行機によってインドネシアは外部世界と連絡を取ることができた重要な役割を果たしたものです。アチェがインドネシア独立の重要な礎となった、特に外部世界との繋がりの面で助けになったという点は、アチェの位置をよく示すものだと思います。西芳実さんがちょうどその時代のアチェの位置づけについてご専門にしていますので、さらに詳しいお話を知りたい人は西さんに尋ねてみてください。

この飛行機の隣に津波後に新しい記念碑が建てられています。四つの面があって、それぞれの面にアラビア文字（ジャウィ）、中国語（漢字）、ヨーロッパ（英語）、インドネシア語で説明が書かれています。この四つの文字の頭文字をつなげると、アラビアのａ、中国のｃ、英語のｅ、そしてインドネシアはかつて東インドと呼ばれていたのでｈとすると、「ACEH」すなわち「アチェ」になっています。これは実は多少こじつけで、もともとは、アチェはかつて東西交易の結節点として栄えた土地で、そこにはアラブ（Arab）、中国（Cina）、ヨーロッパ（Eropah）、インド（Hindia）といった世界各地から人々が集まっており、だからこの土地はACEHと名付けられたのだという言い方があります。

Acehというのは新綴りで、かつてはAtjehと綴られていたことを考えると、この説自体は後から作った話のようですが、アチェの人々が自分たちを世界の中に位置づけて捉えていることがよく表れている言い方です。今回この公園に建てられた4面の塔とAcehの名前の由来を結びつけるのはやや強引なところがありますが、そのように語ることでアチェの外から来た人たちが関心を持ちやすくなるのではないかと思います。

この公園には、ジョギング用のトラックを整備して、そのまわりに舟形のモニュメントが作られています。１つ１つのモニュメントには、アチェの津波後の救援と復興を支援してくれた国々の国旗をつけて、それぞれの国の言葉で「ありがとう」と「平和」と書いてあります。アチェの人々はこの公園でジョギングしながら、モニュメントを通り過ぎるたびに、「日本から支援があった」、「マレーシアからも支援があった」と思い、心の中でそれぞれの国の言葉で感謝するという仕組みになっています。この公園はもともと別の名前があったのですが、このモニュメントが作られて、「世界の国々にありがとう」公園という名前がつけられました。津波博物館のすぐ隣にあって、毎日夕方になると人々がジョギングしています。

津波を契機に位置づけが変わった遺物も観光の対象に

これまで紹介したものは津波に直接関係しているものでした。次に紹介するいくつかは、津波とは直接関係ありませんが、津波を契機に社会のなかでの位置づけがかわったものです。

資料3-7は、シアクアラというイスラム教の聖人と

資料3-8　トルコ人墓地

資料3-10　アチェ州立博物館

資料3-9　津波の被害を受けたアチェ歴史資料館

資料3-11　台湾の支援による復興住宅

その弟子たちの墓所です。これはまさに海岸ぎりぎりのところに置かれていて、津波の直撃を受けて、弟子たちの墓石はばらばらになりましたが、シアクアラの墓だけは壊れずに残りました。霊験あらたかということで津波後に多くの人が訪れています。マレーシアからの救援部隊も、アチェ到着後にまずシアクアラの墓所にお参りしたようです。現在では墓所として整備されています。

これは、津波に直接関係ないけれど、津波をきっかけにして再発見された、あるいは社会における位置づけが再確認された例だと言えます。私はこのようなものも津波ツーリズムの対象だと思いますが、アチェのみなさんはこれを津波ツーリズムの対象と言ったらどう思うでしょうか。

ツーリズムに入るか入らないかという例はほかにもあります。資料3-8は、トルコ人墓地です。かつてアチェはトルコと緊密な関係があり、トルコの人々が住んでいました。その墓地が津波で被害を受け、津波後にトルコの支援団体が中心になって墓地を再建するとともに、付近の住宅とモスクを再建しました。

地域に関する情報拠点の再生
――歴史資料館、州立図書館

バンダアチェ市内の情報拠点としては、津波で大きな被害を受けたアチェ州立図書館や文書館、そして歴史資料館があります。歴史資料館は「世界の国々にありがとう」公園のすぐ隣にあって、津波で建物が全壊してしまい、アチェの歴史に関する資料がすべて失われてしまいましたが、ようやく建物が再建されたところです。

これらの施設は、アチェの人々が世界の中の自分たちの位置づけを確認するために歴史文書や文献を整理しているところであり、それが津波の被害を受けて情報が失われた後でアチェの歴史をどうやって再構成するのかにとても関心があり、世界にとっても意義があると思うので、私は津波ツーリズムでぜひ訪れるべき場所だと思うのですが、アチェの人々はこれが津波ツーリズムの対象だと言われたらどう思うでしょうか。

これらのほかに、内陸部にあって津波の被害は直接受けませんでしたが、アチェ州立博物館もあります（資料3-10）。

資料3-12　コカ・コーラ社が再建した小学校

資料3-13　ホンダが建てた診療所

世界からの支援を象徴する建物は災害復興を考えるヒントになりえる

アチェの復興過程の特徴は、世界各国から支援団体が入って大規模な支援活動が行われたことです。そのことは支援国別の復興住宅によく表れています。バンダアチェ市内や郊外には、支援した国や団体ごとに住宅の形や色が違う復興住宅地がいくつも作られています。資料3-11のように、中国、台湾、トルコなどの支援団体が作ったそれぞれ特徴がある復興住宅地があります。これらの復興住宅はアチェが外部社会から支援を受けて復興したことを示すものですし、将来起こるかもしれない別の土地での災害からの復興に対するヒントになるかもしれないので、私は津波ツーリズムの対象に入れてはどうかと思いますが、アチェの人々はどう考えるでしょうか。

外の世界から支援を受けてアチェが復興したことをよく示す別の例として興味深いと思うものをいくつか紹介します。資料3-12はコカ・コーラのロゴが見えますが、コカ・コーラの生産工場ではなく、小学校です。校舎が津波で壊れて、コカ・コーラの会社が再建したため、学校側が感謝のしるしとしてコカ・コーラのロゴを校舎にそのままつけたものです。遠くから見えるところに、しかもコカ・コーラのロゴそのものを貼りつけているのはたいへん興味深いです。

また、ホンダが再建を支援したのでホンダのロゴをつけた診療所もあります(資料3-13)。このようなものを津波ツーリズムの対象に含めるかどうかは社会によって違うかもしれません。今日の世界では災害が起こったときに自分たちの共同体内や国内だけでなく、外の世界からの支援も受けて対応するようになっていることをよく示しているため、私はこれも津波ツーリズムの対象に含めてはどうかと思いますが、アチェの人々はどう思うでしょうか。

モバイル博物館構想を通じてアチェの過去、現在、将来をどう語るか考える

このように、バンダアチェの町には津波の遺物や痕跡がたくさんあります。また、津波後に作られたものや、津波を契機に位置づけが見直されたものもあります。こういったものを含めて津波ツーリズムの訪問先として紹介するのがモバイル博物館の考え方です。その際に、どのサイトを入れるのかを選ぶ必要があるのと同時に、それぞれのサイトにどのような物語があるのかを語ることが必要です。

どのサイトを選んで、そこにあるいろいろな物語の中からどれを選んで示すのかは、アチェの人々とアチェの外の人々が協力して行う必要があります。それは、いまのアチェをどう語るかということだけでなく、過去をどう語るか、そしてそれを通じて将来をどう語るかと関連しているからです。このことについて、今後、アチェのみなさんとぜひ考えていきたいと思っています。

また、今日紹介したのは写真ばかりでしたが、写真以外の情報としては、音声や動画や文書などいろいろなものがあります。それをモバイル博物館にどのように入れるかも考えなければなりません。それについては明日以降、このワークショップで一緒に考えたいと思っています。

質疑応答

アブドゥル・ムザキル（大アチェ県環境局） 最初に、本日のワークショップが記念碑的なものであると申し伝えたいと思います。特に一つ申し上げたいのは、先ほど主催者から「英語ではなく日本語とインドネシア語の二つの言語を使うことで、このシンポジウムが国際的になった」との話がありましたが、忘れてはならないのは、この場にもう一つの言語があったということです。それは冒頭の林行夫先生のご挨拶で使われた「プーハバ」という言葉に表れたアチェ語です。先生が「プーハバ」と呼びかけてくださったおかげで、私たちは「ハバゲ」――「ごきげんいかがですか」という問いに対して「はい、たいへんよいです」という答えをアチェ語で返すことができました。この国際的なシンポジウムの場でアチェ語を三つめの言語として入れてくださった林先生に深く感謝したいと思います。

林先生のお話のなかにロシアの文学者のお話がありました。ところで、ロシアの文学者のほかに、ここアチェにも文学者がいます。もしこの場にアチェの文学者がいたら、「笑うのはいっしょにできるけれど、いっしょに泣くことは難しい」と言ったのではないかと思います。しかし、ここで実際に何が起こったのかを考えてみますと、日本の方がたはアチェの人びとのために、ともに笑うだけでなく、ともに泣いてくれたのだと思います。そのことについて深く感銘を受けたことをお伝えしたいと思います。

さて、私は地方政府で仕事をするにあたって、災害対応について一つ考えていることがあります。災害に関してはさまざまな分野がありますが、それはいずれも一つにおさまることはなく、多様な側面からアプローチする必要があるということです。また、災害といっても、津波や地震だけではなく洪水もありますし、海岸の浸食もあります。多様な側面からアプローチしなければなりませんし、最初は災害というかたちで出てこないものも、じつは災害対応のなかに含まれるのではないかと思っています。

京都大学地域研究統合情報センターと津波防災研究センターとの協力によって、災害に弱いアチェの各地域の対応力の向上にも直接つながるような働きがあることを大いに期待しています。日本とインドネシア、そしてとくにここアチェで、さまざまな機関――学術機関や地方政府のさまざまな人たちが協力して、災害対応に総合的にアプローチする新しい企画、これまでになかったようなプランをつくり、それをもって新しい災害対応のかたちを世界に示すことができればと思っています。

アチェにある「地域の知」のうち世界の見本となるものはなにか

リスワン（鉱業エネルギー局） 最初に、本日のシンポジウムで日本語とインドネシア語が使われたことがたいへんよかったということをぜひお伝えしたいと思います。評価で言えばプラスがたくさんついたと考えています。日本語とインドネシア語が使われることで、心が一つになったと私たちは感じています。

また、今日のお話のなかで出てきた「地域の知」について興味深く伺いました。これから数日間のシンポジウム・ワークショップのなかで、ぜひ「地域の知」について掘りさげた議論をしていただきたいと思います。日本語とインドネシア語を使うことで、私たちはより深く理解しあえていると感じています。そのような状況でぜひ「地域の知」について深い議論を展開していただきたいと思います。

アチェにもさまざまなかたちの「地域の知」があり、そのなかには実際に災害対応に役立ったものがありました。たとえばアチェの西海岸のシムル島には詩の詠唱によって情報を伝える伝統があります。2004年12月に地震が発生したとき、詩の内容に従って高いところに避難したために災害対応がうまく図られた例もあります。詩は親から子へ、子から孫へと伝わるものです。アチェにすでにある「地域の知」でどのようなものが使えるのか、またどのようなものが世界にとって見本となるのかにぜひ触れていただけたらと思います。

小さな災害情報を集めて大きな災害を防ぐ「災害と社会　情報マッピング・システム」

山本博之　アブドゥル・ムザキルさん、ありがとうございました。先ほどの発表では時間の制約のために話を途中で終わらせましたが、モバイル博物館の次の展開として私たちが考えていることをお話しすることがご質問へのお答えになると思いますので、それを少

資料4-1　社会問題アラート

し紹介させていただきたいと思います。

先ほどお話ししたモバイル博物館は、2004年の津波からの復興過程を記録する仕組みでした。これは、はじめにお話しした災害情報マッピング・システムを利用して過去の災害の記録のために使っている例です。他方で、同じシステムを利用して、過去の災害だけでなく、現在の日々の災害についても地図上で見ることができます。さらに、このシステムを少し改造すれば、災害だけでなく、犯罪や事件についても同じように情報を集めて地図上で示すことができます。

2004年の津波は十数万人の人が亡くなる大きな災害でしたが、このシステムは、橋が壊れただけや道が崩れただけで、人が亡くならないような小さな災害の情報を集めるシステムです。このような小さな災害の発生と犯罪や事件などの社会問題の発生の2つのデータを取って重ねていくと、小さな災害をそのまま放っておくと、その地域社会は治安が悪化して犯罪や事件が増えるという関係が見られる傾向があることがわかってきました。データの数が少ないのでまだ仮説の段階ですが、これからこのシステムを使って情報を収集するとはっきりした傾向が表れてくるのではないかと思っています。

もしその仮説が正しいと示されれば、それは次のような意味を持つはずです。小さな災害が起こったとき、人が亡くなっていないからと対応をあとまわしにしていると、それが間接的に治安上の問題を引き起こしかねないので、治安上の問題を未然に防ぐためにも政府は小さな災害にもきちんと手当をしていくべきということになります。このシステムは、そのような小さな災害がどこでどのように起こっているかをモニターすることも可能です(資料4-1)。

このシステムは試験運用中ですが、近いうちにその運用方法をアチェの人々といっしょに考えたいと思っていたところでした。小さな災害について考えることの必要性についてアチェの人々がどのように考えるかを伺いたいと思っていましたが、ムザキルさんのご質問はとてもよい方向づけを与えてくださったと思います。

エルディナ・ファティマ　災害リスク・マップを作製するにあたって、私たちも重要だと考えているのは、技術や情報だけではなく、つくった地図をきちんと活用してもらうための住民の意識の向上だと考えています。いくらよいものをつくっても、使う人びとが意味を充分に理解しない、あるいは適切な使い方ができないのであれば、意味がないと考えています。その意味で、いただいたご質問は私自身も心がけたいと思っていることです。

「地域の知」と新たな技術、他地域の知など多様な知の組み合わせを考える

柳澤雅之　「地域の知」が興味深いとのことですが、私たちも同感です。「地域の知」を考えるときに一つだけつけ加えたいことは、「地域の知」はけっして昔からある伝統的なものだけを考えているわけではないということです。それは新しい技術とも組みあわせられるし、ほかの地域で起こっている「地域の知」とも組み合わせられます。どのような組みあわせがよいかを考えることが一つです。

もう一つ、詩の詠唱による伝達ということをおっしゃっていました。詠唱による詩というのは、たぶん本来の目的のサブになっている目的だろうと思います。それ以外にも、伝達する技術、能力、知恵はたくさんあります。たとえば詩の詠唱による伝達がよいとなったときに、伝達という一つの目的に特化したかたちで技術や知恵を適用するのではなく、もっと広い多目的なかたちで知恵を重ねあわせながら使うことが大切だと考えています。そのようなかたちで「地域の知」を新しく作って多目的に使うことが大事だと考えています。